

令和5年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立井田川小学校			
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学力 向上	1 授業改善 ○学力向上・授業力向上に係る研修会(年7回うち指導主事招聘 年3回)→実施 ○全教員による授業公開(年間延べ11回以上実施) →実施 ○全国学力・学習状況調査・みえスタディ・チェックの結果分析による本校の課題の把握と検証(年間2回以上) →実施 ＜検証＞ ●学校アンケート ・児童アンケート「学校の授業はよく分かる」肯定的回答90%以上→89%(前年比－1%) ・児童アンケート「学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う。」肯定的回答85%以上 →85%(前年比＋2%) ・児童アンケート「学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思う。」肯定的回答90%以上 →93%(前年比－3%) ●全国学力・学習状況調査(6年生)・みえスタディ・チェック(4,5年生) ・全国学力・学習状況調査は全国平均,みえスタディ・チェックは県平均を上回る →みえスタディ・チェック :4年生は国語、算数とも県平均を上回った。 5年生は国語、算数、理科とも県平均を上回った。 全国学力・学習状況調査:国語、算数ともに全国平均をやや下回った。	1 授業改善 ・現状の共有と意見の交換により、弱点分析と対応を行っていただいていることを評価する。 ・教員相互での授業の参観や効果的なICTの活用に重点を置いて、授業改善に努めた結果が、授業の理解度に表れていることを評価したい。 ・全国学力・学習状況調査等により、本校の強み、弱みを分析して、教員相互で工夫しながら、授業改善に取り組まれていることが分かった。ICTの活用により、授業風景も様変わりしているが、子どもたちのために、引き続き授業改善をお願いしたい。 ・学力向上のため、授業改善を行い、本校の強みと弱みを見つめ直し、実施したことで成果を得ている。 ・教員同士で話し合い、情報交換しながら取り組んでいる様子が分かった。今後もチーム井田川を継続していただきたい。 ・子どもたちが、自分で考えることの大切さや自分と違う意見があるのはどうしてか、どのように考えればよいかの自問自答が必要である。 ・児童が「授業が楽しい」と感じられる内容をこれからも継続していただきたい。家庭学習の習慣が身につくと、学力向上につながると思う。	1 授業改善 ・児童の学力向上を図るため、指導主事を招請した授業研究会を行い、全教職員による授業公開と事後検討会を通して、個々の教職員が授業力を高める。 ・教員同士の情報交換を密に行い、それぞれの得意分野を活かして授業の改善に努めていく。
	2 基礎学力の定着 ○家庭学習の充実(「家庭学習の手引き」配布, 2回以上の啓発) →実施 ○スクリーンタイムの縮減→白鳥中学校区ノーメディアデー 年5回→実施 ○読書活動の推進→図書館祭り, 家読・親子読書3回以上, 図書館整備→実施 ＜検証＞ ●学校アンケート ・保護者アンケート「家庭で宿題などお子さんの学習の様子を見ていますか」肯定的回答80%以上 →76%(前年比－4%) ・児童アンケート「家で自分で計画を立てて、勉強をしている」肯定的回答80%以上 →64%(前年比－13%) ・児童アンケート「普段(月曜日から金曜日)1日当たりどれくらいの時間、勉強をしていますか」30分以上80%以上 →82%(前年比－2%) ・保護者アンケート「テレビ, ゲーム機, 携帯電話やスマートフォン, タブレットといったメディアを使用する時の約束事(時間, 場所)を決めて、お子さんは使用していますか。」肯定的回答85%以上 →78%(前年比－2%) ・保護者アンケート「読書時間10分以上」 36%(前年比－13%) ・児童アンケート「読書時間10分以上」 60%→61%(前年比－11%) ・児童アンケート「読書は好きだ」 肯定的回答80%以上→76%(前年比－2%) ●図書貸出冊数 年間平均一人あたり76冊以上 →66冊(1月末現在)	2 基礎学力の定着 ・読書の時間が一日10分以上の児童の割合が少なくなっているため、読書に親しませてほしい。 ・読書活動は、理解力の向上と内容の理解により、人生経験を広げる。読書活動を継続的にを行い、児童の意識、感情を豊かに育てていただきたい。 ・読書を通じて、読解力がつく。理解して読むようになってほしい。そして、本の中の世界を広げてほしい。 ・読んでいる本の内容も絵本から、自然科学や社会科学へと広げていけるとよい。 ・読書で子どもたちが好んで読む本はどんなものかを先生方がつかみ、その本から、もう一歩先の本を読むようご指導いただきたい。 ・こども新聞にも親しめるとよい。	2 基礎学力の定着 ・週に1度, 高学年は読売新聞の切り抜き, 中学年は中学年の切り抜きのワークシートを行い, 初見の文章を読んで, 文章の要旨をつかみ, 理解力を高める学習を行っているが, 採点後の解説の時間も大切にしたい。
	3 生活習慣の定着 ○校内指導の統一(研修・人権部会, 生活指導部会での協議検討)→検討済 ○児童会による自主活動の充実 生活目標(進んであいさつ, 廊下歩行, 整理整頓等)の設定, 児童会による呼びかけ →実施 ＜検証＞ ●学校アンケート ・児童アンケート「自分から進んで顔を見て, 大きな声で挨拶している」肯定的回答85%以上 →88%(前年比＋1%) ・児童アンケート「学校のきまりを守っていますか」肯定的回答90%以上 →91%(前年比－3%)	3 生活習慣の改善 ・家での学習が楽しいと思える取り組みについては、研修会などで情報を仕入れていただければと思う。ゲームやSNSが楽しいと思える気持ちの分析から、対応策ができればと考える。	・文章を読み取る力や自分にとって、必要な情報を取捨選択する力等の面に課題が見られるため、各教科や単年で育成すべき資質・能力を十分確認し、個別最適な学びと協働的な学びの視点で創意工夫ある授業のあり方について研修を深める。
成果と課題(達成状況を含む)			
1 授業改善 ○「聴き合い, 伝え合い, 主体的に学ぶ子どもをめざして」を研究主題として, パーグループでの協働的な学習と, 効果的なICTの活用に重点を置いて授業改善を進めた。教員相互での授業の参観や, 全国学力・学習状況調査とみえスタディチェックの結果の分析から, 本校の強みと弱みを見つめ直し, 授業改善に活かした。その結果, 児童アンケートの「学校の授業はよくわかる」の肯定的な回答が89%(前年比－1%)となった。また, 「学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて, 自分の考えを深めたり, 広げたりすることができていると思う。」の肯定的回答は85%(前年比＋2%)であり, 授業で意見が対立する場面を設定し, 自分と違う意見を考えるのは楽しいと感じられるような取組を進める必要がある。また, 「学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思う。」の肯定的回答は90%(前年比－3%)となった。 □協働的な学習と, ICTを授業の中に効果的に取り入れる方法について教職員の研修の中で日々模索しており, 指導の統一と改善に努めている。			
2 基礎学力の定着 ○「家庭学習を30分以上行っている」児童が, 昨年度に引き続き80%(前年比－4%)を超えている。 ●一方で, 「家で自分で計画を立てて, 勉強している」児童が64%(前年比－16%)と減少している。宿題を中心に, やるべきことは取り組むが, 自分で考えて計画的に取り組める児童の割合が減少傾向である。日々の宿題が主に音読, 計算, 漢字とパターン化されているため, 習慣的に取り組めるように指導していく必要がある。また, 端末の活用も含め, 主体的な学びにつながるような家庭学習の指導を行っていきたい。 ○読書活動については, 年間を通しての児童がわくわくするような環境整備や学期ごとの親子読書(1～3年)、家読(4～6年)の取組、図書館祭りや幅広い分野の読書をするための「本のおみくじ」、「読書ゆうびん」の企画を行い、読書への関心を高めた。 □今後も、児童や保護者への啓発を根気強く続けていくことが必要である。			
3 生活習慣の定着 □ノーメディアデーの取組ごとに, 学習時間とスクリーンタイムの集計を行い, 振り返っているが, 目覚ましい効果は得られていない。学校だより等で, 家庭への啓発を行っていきたい。 □児童会で毎月生活目標を立て, 意識して取り組んでいる。定着はなかなかしていないが, 続けていきたい。			
3 生活習慣の改善 生活習慣の向上については、児童会や委員会による主体的、自発的な取組の機会を設け、児童集会等で啓発を進める。メディア使用の影響を保健指導で伝えたり、ノーメディアデーを学校だよりや学年だよりで伝えていくことで、家庭とともに生活習慣を向上させていけるようにする。			

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
ICTの活用	1 ICTを効果的に活用した学習指導 ○ICT機器を効果的に活用した学習内容の充実(1日1回以上の端末活用) ○端末の持ち帰りと家庭学習での活用(4年生以上毎日、3年生以上週1回※3学期現在) ○「ICT活用」の視点を入れた授業研究 ○ICT支援員の積極的な活用、ICT支援員を講師にした研修会の実施 <検証> ●学校アンケート ・児童アンケート「学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思う。」 肯定的回答95%以上 →93%(前年比－3%) ●ICT機器を効果的に活用した学習内容の充実(1日1回以上の端末活用) →100%実施 ●端末を週1回以上家庭学習に活用した割合(4年生以上毎日、3年生週1回持ち帰り ※3学期現在 →100% 実施 ●「ICT活用」の視点を入れた授業研究→年6回 →実施 ●ICT支援員を講師にした研修会の実施→年1回 →実施 2 校務のICT化 ○校務のICT化による総勤務時間の縮減(会議資料のペーパーレス化、教材の共有化、アンケート集計、出席管理等) <検証> ●毎月の過重労働時間 平均30時間以下 ●月80時間を超える時間外労働者の年間延べ人数 年間0人→0人(1月末) ●月45時間を超える時間外労働者の年間延べ人数 年間0人→18人(1月末) 前年比+4名	1 ICTを効果的に活用した学習指導 ・ICTを効果的に活用した学習指導ができていた点を評価したい。 今後も継続していただきたい。 ・ICTの活用は、児童全員の学習に役立つと思うため、授業での取り組みに活用してほしい。 ・「ICT機器を使うのは役立つと思う」の項目が93%であったが、(7%の子が)授業についていけるように指導していただきたい。 タイピングができるようにローマ字を習得させる必要がある。 ・情報を系統別に整理する、個々の意見をデジタルのボードに書き込める等のアプリケーションソフトの活用が進んでいて、安心した。 ・児童の動画活用事例、演奏録画事例など紹介していただき、DX活用に乗り遅れることなく、チーム井田川で取り組んでいただきたい。 ・パソコン端末を持ち帰った持ち帰り学習については、調べ学習やドリル、音読や楽器の演奏の録画などに今後も有効活用してほしい。 ・スマホ・パソコンを小中学生が持っているのが大半のようである。井田川小は、73%の所持率であるが、使用方法の学習をお願いしたい。新聞報道では、小中学生がスマホによる詐欺にあうことが多くなっているようである。 2 校務のICT化 ・校務のICT化を進め、チーム井田川で情報交換し、働き方改革を進めていってほしい。	1 ICTを効果的に活用した学習指導 ・教育活動全体を通して、効果的なICT活用のあり方を検討するために、ICT支援員や指導主事による研修会を実施するとともに、全職員で教材や資料等の共有化を進め、教科等における効率的な活用努める。 ・端末の持ち帰りについて、効果的な活用の仕方を今後も模索・検討していく。
	成果と課題(達成状況を含む)		
	1 ICTを効果的に活用した学習指導 ○ICT支援員を講師にした全教員参加の研修会を実施した。また、ICT支援員活動連絡シートを活用し、職員間の情報共有に努めた。さらに、授業支援や個別の相談など、ICT支援員の積極的な活用努めた。全体研修会にも参加いただき、ICTを活用した授業の提案をもらった。 ○夏の全体研修会に情報教育担当指導主事を招聘し、協働的な学びと個別最適な学びについてのご助言をいただいた。 ○ICT機器を効果的に活用した学習を全学年でおおむね1日1回以上は実施した。一人ひとりの考えを全体に共有する場面では、オクリンクやジャムボードを使い、学習を行った。協働学習の場面では、グループで調べ学習をしたり、動画を撮りあったり、Googleスライドに共同編集して発表したりした。また、ICTの活用を研修の重点項目に挙げて取り組み、全ての研究授業において、ICTの授業での取り入れ方や児童の使い方の問題点や効果的な活用について話し合い、普段の授業での活用に生かした。その結果、「学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思う」児童が、93%(前年比－3%)であった。年間を通して、端末の持ち帰りを4年生以上は毎日持ち帰り、3年生は3学期から週に1度程度持ち帰る予定である。 □自主学習においても、幅広い活用法を模索していく必要がある。 2 校務のICT化 ○校務のICT化による総勤務時間の縮減については、会議資料のペーパーレス化、教材の共有化、Googleフォームを活用したアンケート集計、C4thでの出席管理等により、校務のICT化を進めた。時間外勤務は、昨年度が一人当たり年間平均で月30.1時間(1月末現在)だったのが、年間平均で月26.73時間(12月末現在)に縮減した。 □今後も、総勤務時間の縮減に向けて、働き方改革を進めていく必要がある。		2 校務のICT化 ・職員間で掲示板や個人連絡を活用し、校務の効率化とペーパーレス化に心がけ、働き改革を意識し、勤務時間の縮減に努める。
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
長欠減少	1 不登校児童への支援 ○児童が安心して学べる魅力ある学校・学級づくり ○学校内外の教育相談・支援体制の充実(スクールカウンセラーや関係機関の助言を生かしたケース会議、支援会議の実施) ○教職員の教育相談に関する専門性の向上 <検証> ●学校アンケート ・児童アンケート「学校でいじめや暴力の心配がなく、安心して学習することができる。」肯定的回答95%以上 →82%(前年比－12%) ・児童アンケート「自分には、よいところがあると思う。」(自己肯定感)肯定的回答85%以上 →80%(前年比－1%) ●不登校児童が、学校内外の機関で相談・指導を受けた割合(100%)→100% ●スクールカウンセラーのコンサルテーションや教育相談に関する研修を受けた学級担任の割合(100%)→100%	1 不登校児童への支援 ・不登校は、何が原因であるのかを把握し、外部機関とも連携しながら取り組んでほしい。 ・不登校児童には、無理をさせず、その子にあった教育の受け方等をアドバイスできればと思う。いろいろな情報を集め、指導の方向性も見えているので、継続していただきたい。 ・想定される課題の対応に対し、多方面とのコミュニケーション、情報収集を図られており、適切な対応ができていたと思う。 ・家庭との連携を大切にして、児童の様子を見ながら支援して頂きたい。 ・教育支援センター(旧 適応指導教室)への通級や放課後登校、保健室登校を行ったり、関係機関と連携しながら、支援を継続してほしい。 ・新聞報道によると、いじめが最も起きやすいのは小2であるとのことであった。小1から小3の間に起きやすいため、配慮をお願いしたい。 ・不登校の解消に向け、非常に積極的な活動をされており、よい結果が出ていることを評価する。	1 不登校児童への支援 ・コロナがあげ、学校が再開した頃は、友達に会えてうれしいと思っていた子が多かった。そんな思いを継続させるとともに、一日の大半は授業であるため、授業が楽しいと思えるような授業づくりを行っていきたい。 ・ゲームの中で人を殺し、「死ぬ」という言葉を多用している。そして、現実社会の中でも使っている。どれだけ人を傷つける言葉であるのかを振り返らせ、その都度指導していく。そんなつもりで言ったわけではないが、結果として、相手を傷つけてしまう場合もある。思いやりのある言動とは何かを考えさせ、チクチク言葉をやめ、ふわふわ言葉を話せるように指導していく。 ・「不登校対策初期対応マニュアル」に基づいた取組を全職員で改めて確認し、欠席が3日間続いたら家庭訪問や家庭連絡を必ず行い、未然防止と早期発見・早期対応に努める。どの児童にも起こりえる可能性があることを十分認識し、児童の些細な言動に対して、注意深く観察し、気になる児童が現れたら、組織的に見守る体制がとれるよう取り組む。 ・ピンクシャツ運動を中心に、いじめ防止の活動を引き続き行い、学校全体でいじめのない雰囲気づくりに取り組む。 ・低学年のうちから、自己肯定感を高めていけるような取組を行い、自分の良さに気づいたり、自信をもって学校生活を送れるように支援する。
	成果と課題(達成状況を含む)		
	1 不登校児童への支援 ●「学校でいじめや暴力の心配がなく、安心して学習することができる」と肯定的回答をした児童が82%(前年比－12%)であった。全ての児童が落ち着いて、また安心して過ごせるよう、家庭や関係機関と連携しながら個々に応じた支援をしていく必要がある。 ○自己肯定感を示す「自分には、よいところがあると思う」児童の割合が80%(前年比－1%)である。児童が自信を持ち、自分の良さに気付けるような取組や自分が大切にされていると感じられるような取組を続けていく。 □また、児童が学習面や生活面など、さまざまなことでつまづいた時に、自分で修復することができる力(レジリエンス能力)を高めていくような取組も進めていく必要がある。 ○不登校児童の支援について、今年度は外部機関と連携してケース会議をすることができた。かかっている医療機関に教職員が出向いて話を聞いたり、スクールカウンセラーに支援会議に同席してもらったりすることもできた。 □今後も家庭との連携を大切にし、日々の成長を肯定的にとらえ、前向きな気持ちで生活できるよう支援していきたい。 □スクールカウンセラーや関係機関からアドバイスいただいたことを校内で共有しながら、今後も教職員の専門性の向上に努めていきたい。		

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
地域 連携	1 家庭・地域との連携 ○地域ボランティアの協力→見守り隊(37名登録), 図書館整備(4名登録), 読み聞かせ(7名登録), 環境整備(除草作業 年3回 延べ 61名), 農業(10名登録)、クラブ(伊勢型紙、卓球、ファミリーバドミントン 4名登録)の推進 ○地域の人材と教材を活用した授業の推進 →各学年で実践 1年 野菜づくり、警察の連れ去り防止訓練、昔の遊び 2年 野菜づくり、警察の連れ去り防止訓練、青色パトロール隊、井田川公民館の見学、昔の暮らし 3年 消防団 4年 ゴーヤーの栽培) <検証> ●ボランティアの登録人数 →71名 2 家庭・地域への発信・啓発 ○学校運営協議会での協議 年5回開催 →年5回実施予定 ○学校だよりやHPでの情報発信 学校だより年12回以上 HP年30回以上 →学校だより18号, HP22回(2月末現在) <検証> ●学校アンケート ・保護者アンケート「学校だより, 学年通信, ホームページ等で, 学校の様子が伝わっていますか」 肯定的回答95%以上 →97%(前年比+4%) ・保護者アンケート「学校は相談しやすいですか」 肯定的回答95%以上 →95%(前年比+2%)	1 家庭・地域との連携 ・登下校の時の地域の方の見守りは大切なものと感じている。 ・朝の見守りの際, 休み明けは元気がない。金曜日は休み前で楽しそうである。 ・井田川地区ならではの地域連携のおかげで, 子どもたちの成長があると思う。 ・地域の様々な協力を得ている点について, 地域との関係性が非常に良いことの現れだと思う。引き続き, 地域の方々が支援しようという気持ちになれる魅力ある学校運営に努めていただきたい。 ・家庭と地域との連携を密にして, 子どもたちがストレスを発散させる場所を作ることが大切である。(ちびっこ隊など) ・わが子がちびっこ隊に入っているが, 水鉄砲やキャンドルづくりをして, すごく楽しみにしている。 ・放課後こども教室「ちびっこ隊」では, 学校から離れることで, 児童が羽根を伸ばしている。素の姿を出させ, 心を解放的にさせてあげたい。 ・子どもたちが地域の人々と一緒に行ってみたいと思うことについて意見を聞いてみたい。マイタウン井田川まちづくり委員会として, それによる意見の実現をしたい。 ・地域の高齢化、働き手の流出、子ども人口の減少等、地域衰退の流れの中で、子どもたちが地域の現状を理解し、学習シミュレーションとして、どのように対応していくのかを自発的に企画・立案できれば素晴らしいと思う。地域としても応援していきたい。 ・青少年市民会議では、夏休みものづくり教室や作文コンクール等、大きな行事も行っているため、活用していただきたい。いつも先生方の努力に頭の下がる思いである。健康管理に十分気を付けていただきたい。 ・和泉町では、特に児童数が少なくなっているが、元気に過ごしてほしいと願っている。	1 家庭・地域との連携 ・「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、児童と地域住民との触れ合いを通じて、児童の豊かな心の育成を図り、地域の人材や資源等の有効活用を進める。具体的には、各教科や総合的な時間において、体験活動を支援していただいた地域の方をゲストティーチャーとして迎え、可能な範囲で、既存のカリキュラムの活性化や教科横断学習につなげる。 ・放課後子ども教室や地域の行事等の開催の際には、保護者にメール配信や学校だよりを通して、早めに知らせ、参加を促す。 ・運動会等をはじめとする公開可能な教育活動を保護者や地域に周知し、児童や学校の現状を理解していただくよう努める。 ・協働型コミュニティスクールの推進に向け、学校運営協議会において、児童の活動や取組を紹介したり、意見表明を行う機会を設けたりする。
	成果と課題(達成状況を含む)		
	1 家庭・地域との連携 ○農業委員や読み聞かせボランティアの方々には、野菜作りや絵本の読み聞かせ等、児童が豊かな体験活動を行うための支援をしていただいた。また、毎日の登下校の見守りを行っていただき、安心安全に登下校をすることができた。地域の方々には、除草作業を行っていただき、児童が運動場で気持ちよく運動できる環境づくりを行っていただいた。 ○・地域の方がボランティアとして児童と親身になって関わっていただくことは、児童が自分たちの地域に誇りを持ち、自分のふるさとに愛着を持つきっかけとなっている。 ○地域の人材と教材を活用した学習をコロナ禍が収束しつつある中で再開しつつある。その中でも、1・2年生の青色パトロール隊の方や3年生の消防団の方との出会いは、自分たちの安全な生活を守ってもらっているという感謝の気持ちと自分たちにもできることはないかという気持ちを引き出すことができた。 □今後、どんな地域人材・教材と出合わせ、どんな学びをさせていきたいかを検討し、持続可能な教育課程を編成していきたい。 □地域に根付いた教育課題を総合的な学習の時間のテーマに取り入れ、自分たちで企画・発信できるとよい。地域がよくなるために、自分たちにどんなことができるのかを考えることで、地域とともに育つことができる。その意味で、マイタウン井田川まちづくり委員会の皆様と「井田川の未来を考えよう」に取り組めたことは大変有意義であった。 2 家庭・地域への発信・啓発 ○学校運営協議会では、各委員のさまざまな立場から学校運営に関する貴重なご意見をいただき、学校運営に生かすことができた。 □学校だよりは、学校の様子を伝えるだけでなく、家庭教育の啓発(家庭学習、読書活動、スクリーンタイム、子育てについて等)に関わる内容も掲載していきたい。	2 家庭・地域への発信・啓発 ・学校だよりに、子どもたちの記事(子どもたちの考えや子どもたちがしたこと、子どもたちがしたいこと等)もあってよいのではないか。	2 家庭・地域への発信・啓発 ・学校だよりの定期的な発行とHPへの掲載、メール配信に心がけ、教育活動の理解を促進する。

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
組織的な支援体制	1 特別な支援の必要な児童への組織的な対応 ○状況に応じた支援体制の確立 定期的な情報共有(月1回実施) 定期的な支援会議 →随時実施 2 安心して学び合える学級集団づくり ○いじめのない学習集団作りの推進(ピンクシャツ運動) ○人権教育の推進 白鳥中校区人権教育公開授業年1回, 人権教育実践交流会(レポート研修)の実施年2回, 道徳教育の充実 →実施 <検証> ●学校アンケート ・児童アンケート「学校に行くのは、楽しいと思う。」肯定的回答85%以上 →82%(前年比-5%) ・児童アンケート「学校でいじめや暴力の心配がなく、安心して学習することができる」肯定的回答90%以上 →82%(前年比-12%) ・児童アンケート「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」肯定的回答95%以上 →97%(前年比+1%) ・児童アンケート「学校で困ったときは、先生に相談している」肯定的回答80%以上 →75%(前年比-5%) ・児童アンケート「学校のきまりを守っている」肯定的回答90%以上 →91%(前年比-3%) ・保護者アンケート「早寝, 早起き, 朝ごはんの習慣がついていますか」肯定的回答90%以上 →84%(前年比±0%) 3 特別支援教育の校内研修の実施 ○研修の充実→通級指導教室, 教育支援センター, 放課後ディサービス, 学童の全員参観と還流報告の実施 <検証> ●通級指導教室, 教育支援センター, 放課後ディサービス, 学童の全員参観と還流報告(100%)→100%	1 特別な支援の必要な児童への組織的な対応 ・先生方の児童に対しての対応が、一人ひとりの児童の大きな成長につながっていると思う。 ・支援を求める子どもを全体で孤立させないように気をつけていたきたい。 2 安心して学び合える学級集団づくり ・児童アンケートの結果から、いじめに対する児童の考えが、非常に理解ある結果が出ている。 ・支援が必要な児童と一緒にいることで、その様子が普通のことだと理解できるように育っていけばと感じる。 ・いじめについて、第三者的なアンケートのようなもので、潜在的ないじめがあるか調査できればよい。 ・登下校の見守りでも、きつい言葉を聞くことがある。振り返らせていただくとうい。 ・児童アンケートの「学校でいじめや暴力の心配がなく、安心して学習することができる」が82%であった。いじめや暴力が原因ではないにしろ、安心して学習できる環境にないと感じた児童がいたことを重要課題ととらえ、改善していく必要がある。家庭や関係機関との連携は重要だと思うが、児童への聞き取りなどにも、積極的に取り組んでいく必要と考える。	1 特別な支援の必要な児童への組織的な対応 ・どの児童にも特別支援教育の視点を念頭に置いた対応や支援に心がけ、気になる児童については、早期かつタイムリーな支援会議の設定を検討する。その際、関係機関等の職員からの助言を得るなど、情報共有から行動連携につなげる。 2 安心して学び合える学級集団づくり ・各教科、道徳、学活、総合的な学習の時間において、仲間の大切さや児童が日常的に使う言葉の持つ意味等について考えさせる手立てを工夫し、安心して学びあえる学級風土を醸成する。
	成果と課題(達成状況を含む)		
	1 特別な支援の必要な児童への組織的な対応 ○定期的な情報共有に加え、必要に応じて随時支援会議や校内ケース会議を開いた。教職員の関わり方や支援員の配置を変えるなど、有効な支援方法を話し合うことができた。その結果、落ち着いた学習できるようになり、「学校に行くのは、楽しいと思う」児童が82%になった。 2 安心して学び合える学級集団づくり ○4月と11月に「いじめ防止月間」を実施し、人権集会ではいじめ防止標語の発表を行ったり、高学年では弁護士を招いていじめ予防授業を実施したりしてきた。ピンクシャツ運動では、いじめをなくすための自分の決意を投函し、掲示を行うことでいじめを生まない環境づくりを行ったり、ピンクシャツデーを設定し、ピンクのものを身に着けることでいじめがいけないことであることの意味表示を行った。人権集会では、各学年で人権学習で学んだことを発表したり、人権フォーラムで学んだことを還流することで、人権意識を高め合うことができた。○人権教育実践交流会では、各学年ごとに具体的な子どもの姿を通して、人権教育の実践を振り返ることができた。教師一人ひとりが人権意識を高く持ち、子どもの些細な変化をキャッチすることが大切であると再確認できた。 3 特別支援教育の校内研修の実施 ○教職員が直接、通級指導教室, 教育支援センター, 放課後ディサービス, 学童に出向くことで、具体的な支援方法を学んだり、関係機関との連携を深めることができた。そして、それぞれの場所で学んだことを全体に還流することで、教職員全員が幅広い内容の支援方法について知識を深めることができた。 □今後も、困り感をもつ児童の支援に生かせるヒントを得るために、特別支援教育の研修を深め、個々の支援に生かせるようにしていく必要がある。	3 特別支援教育の校内研修の実施 ・教師全員が校内研修をして、高めていくことが大切である。 ・特別支援教育について、情報の収集と共有を進めていることを評価する。不登校と同じようにチーム井田川で進めていただければと思う。	3 特別支援教育の校内研修の実施 ・長期休業中等に、教育委員会等が主催する研修講座に積極的に参加し、スキルアップを図り、職員間に還元する。また、各学年や特別支援学級の取組に学ぶ機会を設け、その支援について全職員で支え合う意識を高める。